

博士論文（要約）

論文題目 戦国期遣明船研究

氏名 岡本 真

目次

序章 研究史と課題	1
一 中世後期対外関係史研究のなかの日明関係史研究	3
（1）基礎の確立	3
（2）《地域》と《国家》の関係史	6
二 本稿の課題と構成	9
（1）課題	9
（2）構成	14
第一部 経営者・派遣主体からみた戦国期遣明船	25
第一章 寧波の乱以前の遣明船と細川氏	26
はじめに	26

一	応仁度船	31
二	文明九年度船・同十六年度船	34
三	明応度船	36
四	永正度船	41
五	大永度船	48
	おわりに	52
第二章 「堺渡唐船」考		
	はじめに	67
一	関係諸勢力の立場	70
	(1) 『天文日記』の「唐船」「渡唐船」と堺商人、本願寺、土佐一条氏	70
	(2) 細川晴元による「堺渡唐船」派遣の推進と大内義隆・畠山植長による妨害	77
二	搭乗者と派遣目的	80

(1) 『活套』所収外交文書……………	80
(2) 外交文書の記載内容……………	87
三 歴史的位置……………	90
(1) 寧波の乱後の交渉と嘉靖准勘合の移動……………	90
(2) 天文八年度船との共通点と差異点……………	98
おわりに……………	105
第三章 種子島「新貢之三大船」考……………	118
はじめに……………	118
一 船団構成と渡航時期……………	121
(1) 基本史料と従來說……………	121
(2) 中国側の公文書の記載……………	127
二 派遣主体にかかわる従來說……………	132

(1) 大友氏と種子島氏	132
(2) 大内氏の「種子島渡唐船」	135
三 一号船・二号船の派遣主体	140
(1) 「芳光」と春芳靈光	140
(2) 寿光とその派遣主体	144
おわりに	148
第四章 天文年間の遣明船における大内氏の優位と国内活動	163
はじめに	163
一 将軍との関係の維持と尊重	165
(1) 遣明表の送付	165
(2) 回賜品の献上	169
二 将軍尊重の見返り	172

(1)	弘治勘合の確保	172
(2)	国内他勢力への働きかけ	174
三	人材の取り込み・囲い込み	178
(1)	通事の確保	178
(2)	細川氏関係者の登用	179
	おわりに	183
	第二部 搭乗者からみた戦国期遣明船	193
	第一章 「山隣派」と遣明船	194
	はじめに	194
一	大徳寺派と遣明船	196
(1)	一休宗純とその周辺	196
(2)	養叟宗頤の法系	202

二 妙心寺派と遣明船	205
(1) 細川船と龍安寺	205
(2) 策彦周良と妙心寺派禅僧	213
おわりに	216
第二章 遣明船と京都商人	227
はじめに	227
一 錢氏	229
二 角倉吉田氏とその一類	234
三 五井氏	241
おわりに	244

第三章 遣明船貿易から倭寇・南蛮貿易へ——堺商人日比屋の活動からみた——	252
はじめに	252
一 日比屋と対外貿易	256
(1) 遣明船貿易	256
(2) 来航船貿易	259
二 了珪とその親族	262
(1) 空道の系統	262
(2) 宗清の系統	265
三 日比屋の活動にみる遣明船貿易と来航船貿易の連続性	269
(1) 助五郎らと了珪らの関係	269
(2) 助四郎の島嶼部貿易への参加	272
おわりに	275

終章 結論と課題	285
一 本稿の結論	285
二 成果と課題	294
（1）戦国期遣明船の時期区分	294
（2）多様な遣明船参加者と後代の対外交渉・貿易との連続性	295

二〇二一年に出版されるため全文公表はできません。
書誌情報は以下の通りです。

著者 岡本真

書名 『戦国期遣明船と国際関係』（仮題）

出版社 吉川弘文館

参考文献一覧(著者名五十音順)

- 青柳勝「戦国・織豊期における堺・大坂商人の活動」『ヒストリア』一二二、一九八六年)
- 「十六世紀における堺商人の商圈・文化圏の拡大」『国史学』一三三、一九八七年)
- 秋山謙蔵『日支交渉史話』(内外書籍、一九三五年)
- 『日支交渉史研究』(岩波書店、一九三九年)
- 阿知波五郎『阿知波五郎論文集 下 医史学点描』(思文閣出版、一九八六年)
- 網野善彦「地域史研究の一視点——東国と西国——」(佐々木潤之介・石井進編『新編日本史研究入門』東京大学出版会、一九八二年)
- 荒木和憲『中世対馬氏領国と朝鮮』(山川出版社、二〇〇七年)
- 荒野泰典「日本型華夷秩序の形成」(朝尾直弘ほか編『日本の社会史一 列島内外の交通と国家』岩波書店、一九八七年)
- ALVAREZ-TALADRIZ, J.L. 「堺の日比屋家に関する一五八六年の新史料」(佐久間正、松田毅一共訳『キリシタン研究』八、一九六三年)
- 伊川健二『大航海時代の東アジア——日欧通航の歴史的前提——』(吉川弘文館、二〇〇七年)

泉澄一『堺と博多——戦国期の豪商——』（創生社、一九七六年）

伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』（吉川弘文館、二〇〇二年）

——「中世後期における対馬宗氏の外交僧」（『年報 朝鮮学』八、二〇〇二年）

——「日朝関係における偽使の時代」（『日韓歴史共同研究報告書』第一期第二分科、二〇〇五年）

——「大内氏の琉球通交」（『年報 中世史研究』二八、二〇〇三年）

——「日明交流と肖像画賛」（東アジア美術文化交流研究会編『寧波の美術と海域交流』中国書店、二〇〇九年）

年）

——「外交と禅僧——東アジア通交圏における禅僧の役割——」（『中国——社会と文化』二四、二〇〇九年）

——「硫黄使節考——日明貿易と硫黄——」（『アジア遊学』一三三、二〇一〇年）

——「大内教弘・政弘と東アジア」（『九州史学』一六一、二〇一二年）

——「大内氏的外交と大友氏的外交」（鹿毛敏夫編『大内と大友——中世西日本の二大大名——』勉誠出版、

二〇一三年）

市村高男「海運・流通から見た土佐一条氏」（同編『中世土佐の世界と一条氏』高志書院、二〇一〇年）

今泉淑夫『東語西話——室町文化寸描——』（吉川弘文館、一九九四年）

上田純一「書評竹貫元勝著『日本禅宗史』（『花園大学研究紀要』二三、一九九一年）

——「大徳寺・堺・遣明船貿易をめぐる諸問題」（浄土真宗教学研究 本願寺史料研究所編『講座蓮如』四、平凡社、一九九七年）

——『九州中世禅宗史の研究』（文献出版、二〇〇〇年）

——『足利義満と禅宗』（法蔵館、二〇一一年）

宇田川武久『鉄炮伝来』（中央公論社、一九九〇年）

衛藤駿「一休宗純の画像」（『大和文華』四一、一九六四年）

榎本涉「幻想の外国医学」（『日文研』四六、二〇一一年）

——『南宋・元代日中渡航僧伝記集成』（勉誠出版、二〇一三年）

海老根聰郎「仲猷祖闡・無逸克勤の来朝とその著賛作品」（『美術研究』二八七、一九七三年）

——「寧波の文人と日本人——十五世紀における——」（『東京国立博物館紀要』一一、一九七六年）

——「詹仲和——伝歴と作品——」（『国華』一一五—一、二〇〇九年）

——「方梅厓——人と作品——」（『国華』一一五—一〇、二〇一〇年）

大庭脩「芳洲文庫の「嘉靖公牘集」について」（『関西大学東西学術研究所紀要』一〇、一九七七年）

大畑博嗣「遣明船をめぐる本願寺・土佐一条氏・大内氏・堺の関係——『天文日記』を中心に——」（『歴史の広場』

九、二〇〇七年）

岡本真 「目録からみた妙智院旧蔵策彦周良入明関係史料」(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室編『中世政治社会論叢——村井章介先生退職記念——』東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室、二〇一三年)

—— 「通事」(村井章介ほか編『遣明船入門』勉誠出版、近刊)

岡本真・須田牧子 「天龍寺妙智院所蔵『明国諸士送行』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二三、二〇一三年)

—— 「宮内庁書陵部所蔵『策彦周良等往来雑記』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二四、二〇一四年)

岡本良知 「ポルトガル・エスパニア船年次来往考」(『十六世紀日欧交通史の研究』六甲書房、一九四二年)

萩原大輔 「中世後期大内氏の在京雑掌」(『日本歴史』七八六、二〇一三年)

長節子 『中世日朝関係と対馬』(吉川弘文館、一九八七年)

—— 『中世国境海域の倭と朝鮮』(吉川弘文館、二〇〇一年)

オラー・チャバ 「遣明使節と明官僚との文書往来——入明記所収外交文書の内容、様式、作成過程」(『古文書研究』七〇、二〇一〇年)

—— 「日本の遣明使節と浙江巡撫朱統——『覽餘雜集』からみる嘉靖二十七年の投書及び金銭詐取事件——」

(『東洋学』一二二、二〇一一年)

—— 「天文八年の「大内氏」日本使節とその貿易活動」(鹿毛敏夫編『大内と大友——中世西日本の二大大名

—— 『勉誠出版、二〇一三年』

鹿毛敏夫 『戦国大名の外交と都市・流通——豊後大友氏と東アジア世界——』 (思文閣出版、二〇〇六年)

—— 『アジア戦国大名大友氏の研究』 (吉川弘文館、二〇一二年)

—— 「遣明船と相良・大内・大友氏」 (『日本史研究』六一〇、二〇一三年)

上村観光 『五山詩僧伝』 (民友社、一九二二年)

栢原昌三 「日明勘合貿易に於ける細川大内二氏の抗争 (第一〜五回)」 (『史学雑誌』二五—九〜二一、二六—二・

三、一九一四・一五年)

—— 「義政時代の日明勘合貿易」 (『説苑』二—四、一九一七年)

—— 「日支貿易港としての寧波港」 (『説苑』五—四、一九二〇年)

—— 「日明勘合の組織と使行 (第一〜四回)」 (『史学雑誌』三一—四・五・八・九、一九二〇年)

河合正治 『安芸毛利一族』 (新人物往来社、一九八四年)

河内将芳 『中世京都の民衆と社会』 (思文閣出版、二〇〇〇年)

川上涇 「送源永春還国詩画卷と王諤」 (『美術研究』二二二、一九六三年)

川上孤山 『妙心寺史』 (妙心寺派教務本所、一九一七年)

川村信三 『ザビエル上洛事情から読み解く大内氏・堺商人・本願寺の相関図——天文年間(一五三—一五五四)』 (瀬

戸内海リンク」の存否をめぐる——」(『上智史学』五五、二〇一〇年)

神戸輝夫「鄭舜功著『日本一鑑』について(続)——」(『窮河話海』——)(『大分大学教育福祉科学部研究紀要』二二—一、二〇〇〇年)

鍛代俊雄『中世後期の寺社と経済』(思文閣出版、一九九九年)

木下聡「室町幕府外様衆の基礎的研究」(『東京大学日本史学研究室紀要』一五、二〇一一年)

木宮泰彦『日華文化交流史』(富山房、一九五五年)

京都市編『京都の歴史三 近世の胎動』(林屋辰三郎・奈良本辰也執筆、学芸書林、一九六八年)

吉良国光「天文年間前半における大内氏と大友氏の抗争について」(『九州史学』一六二、二〇一二年)

國原美佐子「室町時代の書籍入手」(大隅和雄『文化史の構想』吉川弘文館、二〇〇三年)

熊谷宣夫「戊子入明と雪舟(上・下)」(『美術史』二三・二五、一九五七年)

幸田成友『和蘭雑話』(第一書房、一九三四年)

小谷利明「畠山植長の動向——永正く天文期の畿内——」(矢田俊文編『戦国期の権力と文書』高志書院、二〇〇四年)

後藤肅堂「倭寇王直」(『歴史地理』五〇—一・二・四、一九二七年)

後藤秀穂「予が観たる倭寇(上・中・中ノ二・下)」(『歴史地理』二三—五・六、二四—一・二、一九一四年)

小西瑞恵「十六世紀の都市におけるキリシタン女性——日比屋モニカと細川ガラシャ——」〔大阪樟蔭女子大学学

芸学部論集』四六、二〇〇九年)

小葉田淳『中世日支交通交貿易史の研究』(刀江書院、一九四二年)

小林健彦「戦国大名家在京雑掌を巡って——大内氏の場合——」〔駒沢史学』三九・四〇、一九八八年)

——「大内氏の対京都政策——在京雑掌(僧)を中心として——」〔学習院史学』二八、一九九〇年)

伍躍「日明関係における「勘合」——とくにその形状について」〔史林』八四—一、二〇〇一年)

佐伯弘次「大内氏家臣人名事典」(米原正義編『大内義隆のすべて』新人物往来社、一九八八年)

——「室町時代の遣明船警固について」(九州大学国史学研究室編『古代中世史論集』吉川弘文館、一九九〇

年)

——「海賊論」(荒野泰典ほか編『アジアのなかの日本史三 海上の道』東京大学出版会、一九九二年)

——「中世対馬海民の動向」(秋道智彌編『海人の世界』同文館出版、一九九八年)

——「室町期の博多商人宗金と東アジア」〔史淵』一三六、一九九九年)

——「室町時代の博多貿易商人」〔海路』一、二〇〇四年)

——「博多商人神屋寿禎の実像」(九州史学研究会編『境界からみた内と外——『九州史学』創刊五〇周年記

念論文集 下——』岩田書院、二〇〇八年)

佐久間重男『日明関係史の研究』（吉川弘文館、一九九二年）

桜井英治「中世・近世の商人」（桜井英治・中西聡編『新体系日本史十二 流通経済史』山川出版社、二〇〇二年）

櫻井景雄「梅屋宗香と乗福寺本鷗庵遺稿等について」（読史会編『国史論集——創立五十年記念』読史会、一九五九年）

佐藤秀孝「孤峰覚明の伝記史料——『孤峰和尚行実』の訓註——」（駒沢大学禅研究所年報）二〇、二〇〇八年）

佐藤進一「室町幕府論」（『岩波講座日本歴史七 中世三』岩波書店、一九六三年）

清水紘一『織豊政権とキリシタン——日欧交渉の起源と展開——』（岩田書院、二〇〇一年）

——『日欧交渉の起源——鉄砲伝来とザビエルの日本開教——』（岩田書院、二〇〇八年）

下村效『戦国・織豊期の社会と文化』（吉川弘文館、一九八二年）

SHURHAMMER, Georg, S.J., tr. M. Joseph Costelloe, S.J., Francis Xavier: his life his times, The Jesuit

Historical Institute, 1982.

末柄豊「東山御文庫に残された足利義政女房奉書について——文明十五年度の遣明船と取龍首座とに関する一史料

——」（『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇〇八——一 目録学の構築と古典学の再生——天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明——』東京大学史料編纂所、二〇〇九年）

助野健太郎「堺の切支丹日比屋了慶とその家族」（『日本歴史』五九、一九五三年）

須田牧子「大内氏の外交と室町政権」(川岡勉・古賀信幸編『日本中世の西国社会三 西国の文化と外交』清文堂出版、二〇一一年)

——「妙智院所蔵『初渡集』巻中・解説」(中島楽章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院、二〇一三年)

——「大内氏の在京活動」(鹿毛敏夫『大内と大友——中世西日本の二大大名——』勉誠出版、二〇一三年)

——「俊仲周鷹書状(蔭涼軒日録残簡紙背)」(東京大学史料編纂所編『東アジアと日本、世界と日本』(東京大学史料編纂所 第三六回史料展覧会図録) 東京大学史料編纂所、二〇一三年)

関周一「中世「対外関係史」研究の動向と課題」(『史境』二八、一九九四年)

——『中世日朝海域史の研究』(吉川弘文館、二〇〇二年)

——『中世の唐物と伝来技術』(吉川弘文館、二〇一五年)

高尾一彦「十六世紀日本の自由都市」(『研究』四〇、一九六七年)

高橋公明「中世東アジア海域における海民と交流——濟州島を中心として——」(『名古屋大学文学部研究論集』九八、一九八七年)

——「中世の海域世界と濟州島」(網野善彦ほか編『海と列島文化四 東シナ海と西海文化』小学館、一九九二年)

高良倉吉『琉球王国の構造』(吉川弘文館、一九八七年)、同『アジアのなかの琉球王国』(吉川弘文館、一九九八年)

年)

竹貫元勝『日本禅宗史研究』(雄山閣出版、一九九三年)

竹貫友佳子「山隣派の地方展開——大徳寺真珠庵派と朝倉氏」(『日本宗教文化史研究』二二―二六、二〇〇八年)

田代和生・米谷均「宗家旧蔵「図書」と木印」(『朝鮮学報』一五六、一九九五年)

田中清三郎「本願寺経済研究序説——本願寺の領主化について」(『社会経済史学』一一―一〇、一九四二年)

田中健夫『中世海外交渉史の研究』(東京大学出版会、一九五九年)

——『倭寇と勘合貿易』(至文堂、一九六一年、のち二〇一二年に増補)

——『中世対外関係史』(東京大学出版会、一九七五年)

——『対外関係と文化交流』(思文閣出版、一九八二年)

——『前近代の国際交流と外交文書』(吉川弘文館、一九九六年)

——『東アジア通交圏と国際認識』(吉川弘文館、一九九七年)

——『対外関係史のあゆみ』(吉川弘文館、二〇〇三年)

田中博美「武家外交の成立と五山禅僧の役割」(田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、一九八

七年)

玉村竹二『日本禅宗史論集』上・中・下之一・下之二(思文閣出版、一九七六―一九八一年)

陳小法・江静『径山文化与中日交流』（上海辞書出版社、二〇〇九年）

陳小法『明代中日文化交流史研究』（商務印書館、二〇一一年）

辻善之助『増訂海外交通史話』内外書籍、一九三〇年）

天理図書館編『古義堂文庫目録』（天理大学出版部、一九五六年）

豊田武『堺——商人の進出と都市の自由——』（至文堂、一九五七年）

中島楽章「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」『史淵』一四二、二〇〇五年）

——「ポルトガル人日本初来航再論」『史淵』一四六、二〇〇九年）

中田祝夫編『増注唐賢絶句三体詩法幻雲抄』（勉誠社、一九七七年）

中村直勝『中村直勝著作集十一 歴史の発見』上（淡交社、一九七八年）

西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』（吉川弘文館、一九九九年）

西田友広「嘉靖二十六年六月五日寧波府諭の写本について」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』

五七、二〇一二年）

野村晋域「戦国時代に於ける荘園より都市への発達——其の一例としての土佐中村——」『社会経済史学』四——

一、一九三五年）

橋本雄「遣朝鮮国書」と幕府・五山——外交文書の作成と発給——」『日本歴史』五八九、一九九七年）

- 「遣明船と遣朝鮮船の経営構造」(『遙かなる中世』一七、一九九八年)
- 「日明勘合再考」(第九六回史学会大会報告要旨、『史学雑誌』一〇七―一二、一九九八年)
- 「室町幕府外交の成立と中世王権」(『歴史評論』五八三、一九九八年)
- 「丹波国水上郡佐治荘高源寺所蔵文書」(『東京大学日本史学研究室紀要』三、一九九九年)
- 「丹波国水上郡佐治荘高源寺所蔵文書(続)」(『東京大学日本史学研究室紀要』四、二〇〇〇年)
- 「遣明船の派遣契機」(『日本史研究』四七九、二〇〇二年)
- 『中世日本の国際関係——東アジア交通圏と偽使問題——』(吉川弘文館、二〇〇五年)
- 「日明勘合再考」(九州史学研究会編『境界からみた内と外——『九州史学』創刊五〇周年記念論文集 下』岩田書院、二〇〇八年)
- 「再論、十年一貢制——日明関係における——」(『日本史研究』五六八、二〇〇九年)
- 「対明・対朝鮮貿易と室町幕府―守護体制」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係四 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館、二〇一〇年)
- 「日本と中国の(境界)——日明関係を中心に——」(竹田和夫編『古代中世の境界意識と文化交流』勉誠出版、二〇一一年)
- 『中華幻想——唐物と外交の室町時代史——』(勉誠出版、二〇一一年)

——「日本史と世界史とをどうつなげるか——現在の課題への処方箋」(村井章介『世界史のなかの戦国日本』筑摩書房、二〇一二年)

——『NHKさかのぼり日本史 外交篇七 室町』日本国王と勘合貿易——なぜ、足利將軍家は中華皇帝に「朝貢」したのか」(NHK出版、二〇一三年)

服部敏良『室町安土桃山時代医学史の研究』(吉川弘文館、一九七一年)

浜口誠至『在京大名細川京兆家の政治史的研究』(思文閣出版、二〇一四年)

林屋辰三郎『角倉素庵』(朝日新聞社、一九七八年)

速水佐恵子「十六世紀における堺商人の動向——天王寺屋をめぐる——」(『史論』一二、一九六四年)

藤田明良「中世『東アジア』における島嶼観と海域交流——島嶼論への歴史学的アプローチのために——」(『新しい歴史学のために』二二二、一九九六年)

——「蘭秀山の乱」と東アジアの海域世界——十四世紀の舟山群島と高麗・日本——」(『歴史学研究』六九八、一九九七年)

——「中世後期の坊津と東アジアの海域交流——『一乗院来由記』所載の海外交流記事を中心に——」(九州史学研究会編『境界からみた内と外——『九州史学』創刊五〇周年記念論文集 下——』岩田書院、二〇〇八年)

藤原重雄「陳外郎関係史料集(稿)・解題——京都陳外郎を中心に——」(『東京大学日本史学研究室紀要』二、一九九八年)

牧田諦亮『策彦入明記の研究(上・下)』(法蔵館、一九五五・五九年)

松田毅一「小西立佐・日比屋了珪一族に就いて」(『日本歴史』一二七、一九五九年)

——『近世初期日本関係南蛮史料の研究』(風間書房、一九六七年)

三浦圭一『中世民衆生活史の研究』(思文閣出版、一九八一年)

三浦周行『日本史の研究』第一・二輯(岩波書店、一九二一・一九三〇年)

——監修『堺市史』(堺市役所、一九二九〜三一年)

村井章介『アジアのなかの中世日本』(校倉書房、一九八八年)

——『東アジア往還——漢詩と外交』(朝日新聞社、一九九五年)

——『国境を超えて——東アジア海域世界の中世——』(校倉書房、一九九七年)

——「〈地域〉と国家の視点」(『新しい歴史学のために』二三〇・二三一合併号、一九九八年)

——『日本中世境界史論』(岩波書店、二〇一三年)

——『戦国富と野望の外交戦略——なぜ、大航海時代に戦国の世は統一されたのか』(NHK出版、二〇一三年)

年)

森英輔「大曲記 解説・解読」(『松浦党関係諸家系図集』第六集、松浦党研究連合会、一九八五年)

森潤三郎『考證学論攷——江戸の古書と蔵書家の調査——』(青裳堂書店、一九七九年)

森銃三「大田南畝の旧蔵書(中)——南畝文庫蔵書目を見て——」(『書物展望』五二二、一九三五年)

山口隼正『日本帝皇年代記』について——入来院家所蔵未刊年代記の紹介——」下(『長崎大学教育学部社会科学論叢』六六、二〇〇五年)

山崎岳「朝貢と海禁の論理と現実——明代中期の「好細」宋素卿を題材として——」(夫馬進編『中国東アジア外

文化交流史の研究』京都大学学術出版会、二〇〇七年)

山田貴司・高橋研一「宮内庁書陵部蔵「相良武任書札卷」の紹介と翻刻」(『山口県史研究』一八、二〇一〇年)

山田康弘『戦国期室町幕府と將軍』(吉川弘文館、二〇〇〇年)

山本大「勘合貿易と南海路」(松岡久人編『内海地域社会の史的研究』マツノ書店、一九七八年)

米谷均「十六世紀日朝関係における偽使派遣の構造と実態」(『歴史学研究』六九七、一九九七年)

——「漂流民送還と情報伝達から見た十六世紀の日朝関係」(『歴史評論』五七二、一九九七年)

李献璋「嘉靖年間における浙海の私商及び舶主王直行蹟考(上・下)」(『史学』三四—一・二、一九六一年)

論文の内容の要旨

論文題目 戦国期遣明船研究
氏名 岡本 真

本論文は、戦国期の遣明船派遣の実態解明を目的としたものである。

序章「研究史と課題」では、これまでの中世後期日本対外関係史研究の研究史を、日明関係史研究にかかわるものを中心に概観し、本論文の課題が導き出される過程を説明した。

第一部「経営者・派遣主体からみた戦国期遣明船」では、従来、細川氏と大内氏の抗争から大内氏の独占へという流れで語られてきた、当該期における遣明船の経営者・派遣主体の対立構図とその変遷について検討した。

第一章「寧波の乱以前の遣明船と細川氏」では、これまでの研究で細川・大内両氏抗争時代とされてきた、応仁度船から寧波の乱を起こした大永度船までの各遣明船について、細川氏の動向を中心に分析し、細川氏対大内氏という構図の当否を検証した。その結果、応仁度船派遣時には、両者は対立関係にはなく協調関係にあったことや、文明九年度船・同十六年度船派遣時には、細川氏が経営を志向した徴証はなく、対立は見られなかったこと、これらの遣明船は抗争時代と一括するべきではないことを明らかにした。また、明応度船、永正度船、大永度船派遣時には対立が存在したことを確認したうえで、前二者の際は、抗争の焦点が、幕府が派遣を決定した一遣明船団内の、一隻単位の経営権の獲得にあったのに対し、大永度船では、それぞれが経営権の確保を達成し、別個の遣明船団を主体的に派遣できる状態となったうえで、相手方の派遣の妨害や、渡航後の待遇などをめぐって抗争するようになったという変化のあったことを指摘した。

第二章「「堺渡唐船」考」では、従来、大内氏独占時代とされてきた、寧波の乱後の遣明船派遣の実像を明らかにするため、これまで正規の遣明船とは見なされていなかった、史料上に「堺渡唐船」と記される遣明船について、関係諸勢力の立場、搭乗者および派遣の形態や目的、歴史的 position づけの三点を究明した。まず、関係諸勢力については、細川氏と堺商人が主体的に派遣を推進し、本願寺や土佐一条氏が協力し、大内氏や畠山氏が派遣阻止を試みたことを明らかにした。次に、搭乗者および派遣の形態や目的については、忠叔昌恕や半井明英が乗り組む予定だったこと、従来の遣明船と同様に朝貢使節としての体裁を整えていたこと、派遣目的は、前回大永度船の朝貢品の献上や同船の遺留品の返却、収監されていた宋素卿の送還、新勘合および新金印の下賜などの要請だったことを明らかにした。それから、歴史的 position づけについては、寧波の乱後に足利義晴・細川高国が明側とおこなった交渉の延長上に「堺渡唐船」があることを解明し、同船の派遣が計画されるまでの、状況の推移を論じた。また、同船と大内氏の経営した天文八年度船のあいだでは、寧波の乱の際の遺留品の返却や新勘合の獲得などが争点だったことを指摘した。そして、以上を踏まえて、これまで大内氏独占時代とされてきた寧波の乱後にも、

それ以前と同様、同氏と細川氏の抗争が継続していた点を明らかにした。

第三章「種子島「新貢三大船」考」では、前章で検討した「堺渡唐船」と同様、これまで正規の遣明船として扱われてはいなかった、種子島を経由して渡航した「新貢三大船」について、船団構成と渡航時期、派遣主体を検討した。船団構成と渡航時期については、天文十三年に三隻で種子島を発った船団が、嵐に遭い、一号船は消息不明となったこと、二号船は同年のうちに寧波へ至り、翌年帰国したこと、三号船はいったん種子島へ引き返した後、同十五年にふたたび渡航したことを明らかにした。また、派遣主体については、三号船に関しては大友氏と判断した。二号船に関しては、これまで示されてきた大友氏や種子島氏とする見解は論拠が十分でない点と、近年新たに提示された、同船の前身が大内氏の準備していたものだとする説は首肯しがたい点を論証した。そのうえで、二号船搭乗者寿光に注目し、彼が南禅寺聴松院院主春芳寿光に比定されることを明らかにし、同院は細川氏ゆかりの塔頭であることや、第二章で検討した「堺渡唐船」が、天文五年～十一年頃に細川晴元と堺商人によって準備されていた事実とを勘案し、これまで別個のものと思われてきた「堺渡唐船」が、「新貢三大船」の一号船と二号船にあたることの結論に至った。そして、これをもとに、寧波の乱後における、細川氏・大友氏対大内氏という対立構図の存在を明らかにした。

第四章「天文年間の遣明船における大内氏の優位と国内活動」では、遣明船にかかわる大内氏の国内活動に注目し、同氏が天文年間の遣明船派遣において築き上げた優位の国内的要因をさぐった。まず、大内義隆が、外交文書を京都で作成したことや、明皇帝からの回賜品を慣例通りに献上していたことから、彼に將軍足利義晴との関係を維持・尊重する意図のあったことを明らかにし、これが、弘治勘合の確保、競合勢力への妨害、他勢力への協力要請の仲介といった見返りのためであったことを論じた。次に、大内氏の派遣した遣明船の搭乗者に注目し、前代の遣明船の搭乗者やその縁者の登用に成功していたことを指摘した。また、対抗勢力である細川氏に近い人物や、過去に同氏の派遣した遣明船に搭乗した者を、大内氏が自身の派遣した船の要職に起用した点も示した。そのうえで、こうした人材の取り込み・囲い込みは、他勢力の遣明船への人材供給を抑制しただけでなく、同氏の派遣した遣明船が、明側の受容を勝ち得る下地を形成していたと考えられることを示した。そして、これらが大内氏の優位を支えた国内的要因と推察されることを述べた。

第二部「搭乗者からみた戦国期遣明船」では、第一部でおこなった、経営者・派遣主体に関する検討のみからでは明らかにしがたい、戦国期の遣明船に乗り組んだ多様な人々の実態を、個々の搭乗者の分析を通じて解明した。

第一章「「山隣派」と遣明船」では、近年の研究において「山隣派」と呼称されている、大徳寺派・妙心寺派の禅僧・寺院と遣明船とのかかわりについて論じた。まず、大徳寺派については、基本的には同派に帰依する商人などを介した、間接的な関係にとどまっていた点を指摘した。また、これまでの研究では、同派僧と遣明船の接点として堺商人が注目されてきたが、通事なども同派僧と関係していた事実を新たに見出した。一方、妙心寺派については、同派禅僧が直接遣明船に搭乗した事例が複数確認されることを明らかにし、そのうち十五世紀後半の事例は、同派に帰依した細川氏の遣明船経営と強くかかわっていたことを論じた。それから、十六世紀には妙心寺派僧が大内氏の経営した天文十六年度船に搭

乗したが、それは同船正使策彦周良が同派僧と親しかったために、機会を得た可能性が高いことを明らかにした。そして、以上を踏まえて、「山隣派」の禅僧は要職に任じられた形跡こそないが、遣明船とは少なからず関係していたことや、一概に「山隣派」と言っても、大徳寺派と妙心寺派とでは、かかわり方に差異があったことを指摘した。

第二章「遣明船と京都商人」では、従来の研究において堺と博多のみが注目されがちだった、遣明船貿易に参加した商人について、京都商人の銭氏、角倉吉田氏および同氏を中心とする土倉集団、五井氏の三者に焦点をあてて、その詳細を究明した。まず、文明年間以後の遣明船の過半に参加していた銭氏については、その系譜を明らかにし、通事としての活動のみが注目されてきた同氏が商業活動をおこなっていたこと、薬種商を営んでいた可能性があり、貿易に従事したと想定されることを指摘した。次に、角倉吉田氏および同氏を中心とする土倉集団については、吉田宗桂の活動を確認したうえで、ほかにも同集団から豪忠が天文八年度船に参加していたこと、それ以外の同集団構成員についても、同船副使策彦周良とかかわりが深かったこと、豪忠の参加は策彦の周旋によるものであろうことを明らかにした。それから、同船搭乗者五井氏については、これまで堺商人とされてきたが、そうではなく京都商人であることを論じ、北九州までを活動範囲におさめる遠隔地商人であり、金融商人でもあったことを示した。そして、これらの事例をもとに、京都商人の遣明船への参加の実態を示すとともに、遣明船に参加した貿易商人の多様性を明らかにした。

第三章「遣明船貿易から倭寇・南蛮貿易へ——堺商人日比屋の活動からみた——」では、堺商人日比屋一族の分析を通じて、遣明船貿易と、その後の時代の倭寇貿易・南蛮貿易、すなわち中国沿海の島嶼部での貿易（島嶼部貿易）や日本へ来航した中国船やポルトガル船との貿易（来航船貿易）との、連続性の実証を試みた。まず、日比屋を名乗る商人の活動は、一五三〇～一五四〇年代の遣明船貿易と、一五六〇年代の来航船貿易に見出されることを指摘した。次に、来航船貿易に従事した了珪とその親族について、従来説を訂正しつつ、一族構成とその特徴を解明した。そのうえで、遣明船貿易に関与した日比屋と来航船貿易に携わったそれは同族と見なせることを論じ、遣明船貿易と来航船貿易の連続性を示した。さらに、天文二十三年初頭に明へ渡航予定だった助四郎の事例を紹介して、その渡航が島嶼部貿易のためだったことを指摘し、彼は日比屋関係者の可能性があり、この一族は遣明船貿易と来航船貿易だけでなく島嶼部貿易にも従事していたことが想定され得る点に言及した。そして、この日比屋の事例が、十六世紀半ばの環東シナ海域情勢の転換期にあって、遣明船貿易商人が倭寇・南蛮貿易商人へと面を変えつつ貿易を継続した、日本人商人の活動の一端を示していることを指摘した。

以上を踏まえ、終章「結論と課題」では、本論文の検討結果をまとめるとともに、研究史上の意義を説明し、今後の課題を示した。